

韓国植物園調査報告書

2008



社団法人 日本植物園協会

平成 20 年度海外植物事情調査隊

綾部 充、出野 貴仁、井上 尚子、榎本 浩、岡田 博、小倉 祐、小澤 正三、小幡 晃、
倉重 祐二、坂崎 信之、田代 武男、田中 健文、田中 俊弘、邑田 仁、邑田 裕子（アイウエオ順）

韓国植物園調査報告書

社団法人 日本植物園協会平成 20 年度海外植物事情調査隊

社団法人日本植物園協会の平成 20 年度海外事情調査は、韓国ソウルで行われた第 3 回「東アジア植物園ネットワーク」(EABGN)会議と連携して韓国で実施しました。6 月 9 日と 10 日に開かれた EABGN 会議には邑田仁(会長)、岡田博(国際交流委員長)、倉重祐二(植物多様性保全委員会代表)が協会を代表して出席したほか、岡島徳岳(前会長)と小幡晃(理事)がオブザーバー出席しました。岡島前会長は所用のため帰国しましたが、その他の会議出席者と、10 日に日本から到着した後発メンバーが合流して調査隊となりました。6 月 10 日から 13 日までは EABGN 参加者の植物園視察と合同でソウル付近の植物園をまわりました。14 日に済州島に移動し、任炯卓(全南大学教授)氏を講師として島内の植物園および関連する施設や自然の調査を行いました。

調査の実施にあたっては、韓国植物園協会の全面的なご協力をいただきました。また、この調査のための費用の一部には財団法人カメイ社会教育振興財団(仙台市)からの助成金が含まれていることを記し、感謝の意を表します。

平成 20 年度海外植物事情調査隊長
東京大学大学院理学系研究科附属植物園 邑田 仁

目 次

平成 20 年度隊員名簿	3
行動記録	4
1. 国立樹木園 Korea National Arboretum	倉重 祐二・井上 尚子..... 8
2. ピョンガン (平康) 植物園	出野 貴仁・綾部 充..... 15
3. Pinx ゴルフクラブの植栽	田中 俊弘..... 20
4-1. ヨミジ (如美地:Yeomiji) 植物園	田中 俊弘..... 22
4-2. ヨミジ植物園	小幡 晃・田中 俊弘..... 24
5. 平成 20 年度日本植物園協会 海外事情調査「韓国調査隊」に参加して	邑田 裕子..... 34
6. 韓国の野菜料理とお茶	小澤 正三..... 37
7. ソウルと済州島で見た若干の植物について	坂崎 信之..... 41

平成 20 年度隊員名簿

隊長	邑田 仁	東京大学大学院理学系研究科附属植物園
隊員 (アイウエオ順)		
綾部	充	東京大学大学院理学系研究科附属植物園日光分園
出野	貴仁	東京大学大学院理学系研究科附属植物園
井上	尚子	広島市立植物公園
榎本	浩	東京都夢の島熱帯植物館
岡田	博	大阪市立大学理学部附属植物園
小倉	祐	東北大学植物園
小澤	正三	大阪市立大学理学部附属植物園
小幡	晃	東京都神代植物公園
倉重	祐二	新潟県立植物園
坂崎	信之	名誉会員
田代	武男	個人会員
田中	健文	東京大学大学院理学系研究科附属植物園
田中	俊弘	岐阜薬科大学薬草園
邑田	裕子	摂南大学薬学部附属薬用植物園



ソウル郊外の平康植物園にて (平成 20 年 6 月 11 日)

第 3 回東アジア植物園連合大会のエクスカージョンに参加したため、韓国、中国、台湾、ロシア、ニュージーランドなど多くの国の植物園と親交を深めることができた

平成 20 年度海外事情調査 韓国調査隊の行動記録

月 日	地 名	時 間	備 考
6月10日 火曜日	ソウル・インチョン(仁川)空港着 ホテル着	13:20 14:30 16:00 17:30	成田、中部、関西空港から到着 韓国側出迎え見当たらず、バスでホテルへ オリンピック・パークテルは、記念公園そばにあり 国際会議参加者と合流 公園を歩いて縦断し、韓国料理店で夕食会
6月11日 水曜日	ホテル発 国立樹木園着 国立樹木園発 平康(ピョンガン)植物園着 平康植物園発 ホテル着	8:05 9:05 11:50 12:50 13:40 16:10 17:40	晴、暑い1日の始まり 会議参加者(数カ国)と共に、大型バスで移動 園内博物館で紹介ビデオ観覧後、二隊で園内調査 本日より3日間、説明は全て英語 到着後、園内食堂で韓式薬膳定食の昼食 昼食後、同園職員の案内で平康植物園を調査 調査後、同園に対するアンケート調査を受ける ホテル到着後、荷物を部屋に置いて夕食へ 夕食は、ベトナム料理(ビーフンの汁麺ほか)
6月12日 木曜日	ホテル発 熙園・湖巖美術館着 熙園・湖巖発 韓宅(ハンテク)植物園着 韓宅植物園発 ホテル着	9:05 9:55 11:35 12:45 13:45 16:30 17:50	晴、昨日にも増して夏日(予報では30) 韓国伝統庭園の熙園(ヒウオン)を調査し、 同敷地内にある湖巖(ホアム)美術館を見学 到着後、李宅周囲長の歓迎挨拶を受けて、昼食 昼食は、見晴らしのよい食堂で山菜ピビンパップ 韓宅植物園を調査 韓宅植物園も平康植物園と同じく山地の植物園 ホテル到着後、荷物を部屋に置いて夕食へ 夕食は、公園内の焼肉店で、韓国式釜めし他

月 日	地 名	時 間	備 考
6月13日 金曜日	ホテル発	9:05	曇のち晴
	景福宮(キョンポクン)着	9:50	
	景福宮発	11:45	景福宮内の国立民俗博物館を見学
	仁寺洞(インサドン)着	12:00	仁寺洞の裏町で昼食(石焼ピビンパップ) 食後、仁寺洞(骨董店の多い繁華街)を見学
	仁寺洞発	14:40	
	昌徳宮(チャンドクン)着	15:00	到着後、30分待ちで英語での案内を受ける 昌徳宮内の宮庭庭園秘苑(ピウオン)を調査
	昌徳宮発	17:05	夕刻のラッシュアワーに遭遇
	夕食会場着	18:15	各国の植物関係者と共に夕食会(牛肉のシャブシャブ)
	夕食会場発 ホテル着	21:00 21:15	韓国でもシャブシャブ()と言う
6月14日 土曜日	オリンピック・パークテル発	9:30	大型バスで金浦空港へ
	金浦空港着	10:05	11:35 発の済州行きジェット、15分ほど遅れて出発
	済州(チェジュ)空港着	12:50	ソウルは晴れていたが、到着後小雨が降りだす
	済州空港発	13:20	
	昼食店着	13:30	昼食は、石焼ピビンパップと海鮮チジミ
	昼食店発	14:20	本日より任炯卓(全南大学教授)氏の日本語解説つき
	トッケビ道路着	14:30	トッケビ(おばけ)道路の見学と周辺植物の調査
	トッケビ道路発	15:00	夕刻まで小雨
	三姓穴着	15:30	三姓穴の見学と周辺植物の調査
	三姓穴発	16:25	
	済州道民俗自然史博物館着	16:30	済州道民俗自然史博物館を見学
	済州道民俗自然史博物館発	18:00	博物館を出ると本降り
	夕食店着	18:15	夕食は海鮮料理
	夕食店発 ホテル着	19:30 19:45	グレースホテルは浴槽無くシャワーのみ

月 日	地 名	時 間	備 考
6月15日 日曜日	ホテル発	9:10	朝食は、ソウルとは異なり韓国人向けの韓食のみ ホテルを出発する時は雨が本降り、1日雨か？ 調査地到着時には雨あがる
	調査地着	10:30	西帰浦市のあるゴルフ場ゲストハウス周辺を調査 現地は、済州島に自生する植物のみで造園され、 建設された造園家の李()社長自らが案内
	調査地発	11:50	
	昼食店着	12:00	昼食は雉のシャブシャブ
	昼食店発	13:00	
	如美地(ミョミジ)植物園着	13:10	如美地植物園社長と会見後、園内を調査
	如美地植物園発	16:00	日曜日で入園者多し
	李社長の造園用植栽地着	16:50	李社長の案内で10万坪の造園用植栽地を調査
	李社長の造園用植栽地発	18:20	
	ソ ジェチョル写真館着	18:30	旧小学校の校舎を改造した写真家ソ ジェチョル氏の ギャラリーで済州島の草木写真ほかを鑑賞
	ソ ジェチョル写真館発	19:00	
	夕食店着	17:30	夕食は昨日に続き海鮮料理
	夕食店発	21:15	
ホテル着	22:15		
6月16日 月曜日	ホテル発	9:20	ホテルを出発する時は昨日同様本降り
	オリモク着	9:50	オリモク(漢拏山の登山口)到着時はうす曇
	オリモクを出発し、登山開始	10:30	
	山小屋着	13:50	漢拏山の植物を調査(標高850~1700m) 弁当は韓国式海苔巻き(日本式よりも量、および具が 多し)
	山小屋発	14:30	
	霊室駐車場着	17:20	雨にあわなかったのは本当にラッキー
	霊室駐車場発	17:30	
	夕食店着	19:00	韓国最後の夕食はプルコギ(韓国風すき焼き)
	夕食店発	20:30	
	ホテル着	20:45	

月 日	地 名	時 間	備 考
6月17日 火曜日	グレース・ホテル発	8:55	ホテル出発時は曇、やがて霧雨
	榎子林着	9:55	榎子林に到着する頃には小雨 済州市旧左邑にある榎子林(カヤの林)を調査
	榎子林発	11:30	
	済州空港着	12:15	ソウル経由組が搭乗手続き、終了後空港内で昼食 昼食は海鮮チゲ他、昼食後経由組が帰国の途へ
	済州空港発	13:30	日本直行便組はさらに調査
	竜頭岩着	13:45	竜頭岩付近で海岸植生の調査
	竜頭岩発	14:15	
	漢拏樹木園着	14:35	時間が乏しかったので漢拏樹木園の一部のみ調査
	漢拏樹木園発	15:15	
	済州空港着	15:45	帰国の途へ、悪天候により出発時間が遅れる

1. 国立樹木園 Korea National Arboretum

新潟県立植物園 倉重 祐二

広島市植物公園 井上 尚子

1. 来歴

ソウルの王宮の北東約 30 km に位置し、かつて王の墓を囲む神聖な場所として保護されてきた森林は、現代になって、韓国における生物多様性保全の基地として注目されるようになった。国立樹木園の来歴を表 1 にまとめた。

表 1 国立樹木園の来歴

1468 年	李氏朝鮮の 8 代王、睿宗が、父である 7 代王、世祖の墓所（光陵）を作り、周辺の 2、100ha に及ぶ広大な森林を保護林と定める。以後、この森林は日本による統治がはじまる 1910 年まで保護される。
1912 年	日本が光陵の保護林内に朝鮮総督府林業試験場を設立。
1932 年	保護林の植物相について、日本の研究者が科学的調査を実施。
1950～ 1953 年	朝鮮戦争勃発。光陵の保護林は、奇跡的に爆撃による被害を逃れる。
1985 年	森林博物館 工事着手。
1987 年	森林博物館 開館。
1989 年	光陵の保護林を森林浴の場として開放。
1991 年	シベリアトラ、ツキノワグマなどの野生動物の保護区開設。
1997 年	自然保護を優先し、光陵の保護林内への入場者を制限。
1999 年	光陵の保護林のうち、1,157 ヘクタールを国立樹木園として整備。
2003 年	標本庫及び種子貯蔵庫の開設。
2004 年	保護林を森林資源保護地域として登録し、国立樹木園緩衝地帯を設定。周辺の民有地は、許可なく開発できないようにする。
2006 年	光陵のみならず、韓国全域の植物多様性を守り、社会教育や調査研究活動を通して、自然保護の精神を育むという国立樹木園の役割が、「国立樹木園ヴィジョン 2020」によって明確にされる。
2007 年	地元の人々の保護活動への参画を推進するため、地元の代表、地元の政策者、科学者や専門家、NGO のスタッフなどからなる光陵森林保護協議会を開催。
2008 年	「国立樹木園の植物保全戦略」を制定*。
2008 年	東アジア植物園ネットワーク会議（EABGN Meeting）の共催。
2008 年	温室の開設。

*国立樹木園の植物保全戦略 1. 植物多様性の理解と記録、2. 植物多様性の保全、3. 植物多様性の永続的な利用、4. 植物多様性についての一般大衆むけの教育活動の展開、5. より効果的な植物多様性保全の方法の確立

2. 主な施設・区域

保護林 Gwangneung Forest

国立樹木園の周辺の森は、前項で述べた通り、500年以上保護されてきた経緯があり、自然度が高く、生物多様性に富んでいる。2008年現在、127科924種の維管束植物、79科672種の菌類、18目257科3,925種の昆虫類、14科173種の鳥類、12科32種の哺乳類、9科22種の魚類が記録されている（国立樹木園2008年6月発行ニュースレター）。1989年から数年、森林浴の場として公開されたことがあるが、来場者があまりに多く健全な環境が損なわれてきたため、自然保護を優先させ、1997年に閉鎖された。今は樹木園のみ公開しているが、予約制度によって一日の来園者数は5,000人以下に制限されている。

我々が視察したのは、公開部分のみであったが、自然林を生かして整備されたとあって、自生と思われる樹木が多く見られた。日本と共通または近縁の植物種が数多くみられたが、チョウセンゴヨウのように日本において希少種であるものが韓国において普通種であったり、ブナのように日本に多産する樹種が韓国には無かったり、と相違点も少なからずあり、興味深かった。また、国立樹木園周辺では、目につくのが落葉広葉樹と常緑針葉樹ばかりで、チョウセンヒメツゲが唯一、確認できた常緑広葉樹であったことが、印象に残った。



写真1. 園内の随所に残された大木



写真2. チョウセンヒメツゲ

植栽区 Specialized Gardens

国立樹木園は、102haの敷地に、用途や系統、生育特性などによって、以下の15の植栽区を設け、3,344種の植物を展示している。湿生植物園 Bog Garden、つる植物園 Vine Garden、観賞樹園 Ornamental Tree Garden、水生植物園 Hydrophyte Garden、アロマ&タッチガーデン Aroma and Touch Garden、花木園 Flowering Tree Garden、灌木園 Shrubs Garden、温室 Conservatory、広葉樹園 Broad-leaf Tree Garden、針葉樹園 Conifers Garden、しだ植物園 Fern Garden、外国産樹木園 Exotic Tree Garden、食用植物園 Edible Plant Garden、薬用植物園 Medicinal Herbs Garden、高山植物園 Alpine Plants Garden。



写真3. 水生植物園



写真4. オーストラリア産のウォレミアマツが、厳重な保護柵の中で展示されていた



写真5. カラー写真入りの植物ラベル. 中身は取り換え可能になっている



写真6. アロマ&タッチガーデンには、目の不自由な人向けのラベルも設置されている

森林博物館 Forest Museum

森林についての情報を、集め、保管し、展示するための施設で、1987年に開館。韓国の花崗岩と国産の木材を用いてつくられた、韓国の伝統的なデザインの建物となっている。階段を用いて材の紹介をするなど、工夫が見られた。

扱っているテーマは、森林の来歴、森林にすむ動植物の生態、木の利用、国内外の森林の分布、森林の果たす役割、林業、緑化の歴史など多岐にわたり、植物化石や材の標本、ジオラマなど視覚に訴えるものを多く用いた展示・解説がされていた。



写真7. 第一展示室の様子。ケヤキの大木にモニターや動物の剥製を取り付け、韓国の森林の四季折々の動植物の様子を紹介している。



写真8. 階段にもいろいろな材を紹介する工夫がみられる



写真9. 伝統的な樵の技術の紹介



写真10. 伝統的な螺鈿作りの技術紹介



写真 11 . 植生帯の分布図

- 白色：寒帯林
- 水色：温帯北部林
- うす黄色：温帯中部林
- こげ茶色：温帯南部林
- 黒色：暖帯林



写真 12 . 各植生帯の主な構成樹種 (写真 11 と同様、上列から寒帯林、.. 下列は暖帯林)

標本庫及び種子貯蔵庫 Herbarium & Seed Bank

2003年に設立．1階と地下があり、敷地面積は3,849 m²．212万点の植物、昆虫の乾燥標本および動物の剥製を保有する．標本はインターネットで公開している（www.kna.go.kr 現在、標本検索時の使用言語はハングルのみ）．



写真 13．園内で種子を採集している所



写真 14．インターネットで公開されている標本．国内の情報の整理ということから、他施設の標本の情報も取り扱っている

野生動物園 Wildlife Area

韓国の山岳地帯に生存する動物を保護と繁殖を目的として、1991年に開設された．100ヘクタールの敷地内に、シベリアトラ、ツキノワグマ、ワシ類など、18種の動物がいる．今は、非公開区域にある．

3. 所感

国立樹木園は、「国立樹木園ビジョン 2020」で定めた「韓国全域の植物多様性を守り、社会教育や調査研究活動を通して、自然保護の精神を育む」という明確な目的に向かって動いていることが、展示内容や、子供たちに解説する指導者たちの様子からも実感されたが、「自然保護のために入園者数を制限する」という態度にそのことは顕著に表れている。

国立樹木園が取り組んでいる生物多様性保全に係わる活動の一つに、標本情報のインターネット上での公開がある。個々の標本情報の整理と統合、統合された標本情報の公開、と段階を踏んで進んでいることを考えると、この点、韓国は日本よりも先んじているといえるのではないだろうか。これは、韓国では国として生物多様性保全に取り組んでいるが、日本の場合、植物園の個々の取り組みにとどまっており、総体である国レベルでの実績が上がっていない（アピールされていない）ことが原因であると考えられる。

ちなみに、日本植物園協会は平成 18 年より植物種多様性拠点園ネットワークをつくり、わが国の植物種の保全を植物園、国、行政、研究機関、市民団体等と協力して進めている。現在、全国の植物園では、日本原産絶滅危惧植物の 50% が保全されており、今後、保全や栽培技術の向上、知識の普及やデータの蓄積や公開などが行われることで、生物多様性保全に対する貢献が期待されるが、韓国国立樹木園の保全の姿勢や方法は参考にすべきところが多いと感じた。



写真 15. 指導者の説明を聞いている子どもたち

2. ピョンガン（平康）植物園

東京大学大学院理学系研究科附属植物園 出野 貴仁
東京大学大学院理学系研究科附属植物園日光分園 綾部 充

ピョンガン植物園は、2006年に開園した新しい植物園で、ソウルの北、京畿道（キョンギド）抱川市（ポチョンシ）にあり、朝鮮民主主義人民共和国に程近く、気象条件は年平均気温が11.3と比較的冷涼である。そのため、冷温帯の植物や高山植物が豊富で、高山植物が900種、ツツジ属150種など約5、500種が栽培されている（写真1、2）。

園内は11の区画が設けられており、ロックガーデン、ボッグガーデン、ポンドガーデン、シダ園、ツツジ園、コケ園、朝鮮産植物園、温室などがある。



写真1：ピョンガン植物園入口1



写真2：ピョンガン植物園入口2



写真3：ロックガーデン1



写真4：ロックガーデン2

ロックガーデンには主にロッキー山脈、ヒマラヤ山脈、ヨーロッパアルプスの高山植物が広範囲にわたって植栽されている（写真 3、4）。ここでは様々な大きさの石が敷き詰められ、高山の雰囲気再現されるように工夫がなされていた。また、冷涼な気候のためか、周囲の雑草が繁茂しないようで、植栽された植物にラベルが適宜に設置され、とてもわかりやすくなっていた。

ワイルドフラワーガーデンでは自然とほぼ同じ状態の草原を見ることができる（写真 5、6）。野生のものを生かし、多少外国種、園芸種を入れてはいるが、人の手入れはほとんど入れないで管理している。



写真 5：ワイルドフラワーガーデン 1



写真 6：ワイルドフラワーガーデン 2

高山のポッグガーデンにはコウホネの仲間や様々な花色のアヤメの仲間が野生状態で見られた（写真 7）。また、ここ的一部分は消失した高層湿原の生態系が復元されており、ヒメカイウ（写真 8）などの貴重な植物が植栽され、自然の状態がよく再現されていた。

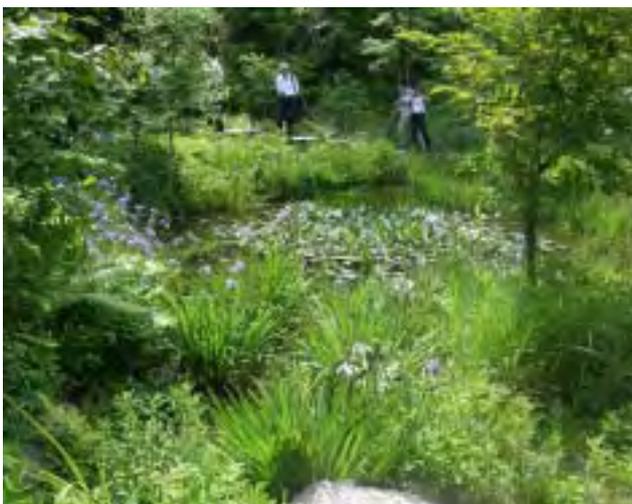


写真 7：高山のポッグガーデン



写真 8：ヒメカイウ



写真 9：低地のボッグガーデン



写真 10：湿地のヤマタバコの群落

低地のボッグガーデンは学校の自然学習や遠足で利用される場所である（写真 9）。植物だけでなく、昆虫や野鳥の観察に適した場所で、アヤメの仲間のほかヤマタバコ（写真 10）などが植栽されている。

ポンドガーデンは大きな池もあるが、小さく造られた池がいくつもあり、その中に水生植物が栽培されていた（写真 11）。主にハスの展示用で、その他にハナショウブも少しだけ植栽されていた。それぞれの池の周囲は様々な草本類が植栽され、花壇のように利用されていた（写真 12）。また、この周囲は低木類が植栽されており、斑入りや黄葉、紅葉など品種が集められていた。



写真 11：ポンドガーデン



写真 12：ポンドガーデンの周囲の植栽

シダ園ではシダ植物が樹下植栽として程よく配置、植栽されていた（写真 13、14）。樹冠によって日当たりの違いがあるので、その違いによっても植栽するシダの位置を変えていた。水生のシダも瓶に入れて配置していた（写真 15）。シダ植物以外にもホトトギス類、ギボウシ類、フタバアオイ類なども植栽されていた（写真 16）。また、若干斜面地にあり、土が流されないように水路が工夫して造られていた。



写真 13 : シダ園 1



写真 14 : シダ園 2



写真 15 : 水生シダ植物の展示



写真 16 : シダ園 3

コケ園は樹林下に倒木、組んだ岩の間などをうまく利用して造られていた(写真 17)。やはり雑草の繁茂するような場所ではないので、植栽されたコケがわかりやすくなっており、コケの生育条件に合わせるために、ミストが散布されるように整備されていた(写真 18)。また、コケだけでなく、この場所の条件に合った草本や低木も植栽されていた。

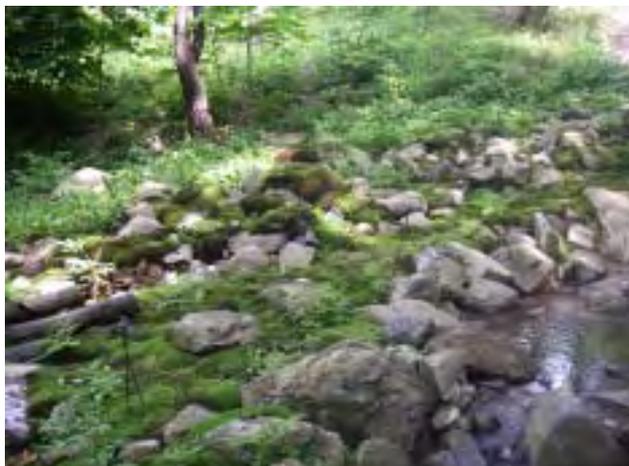
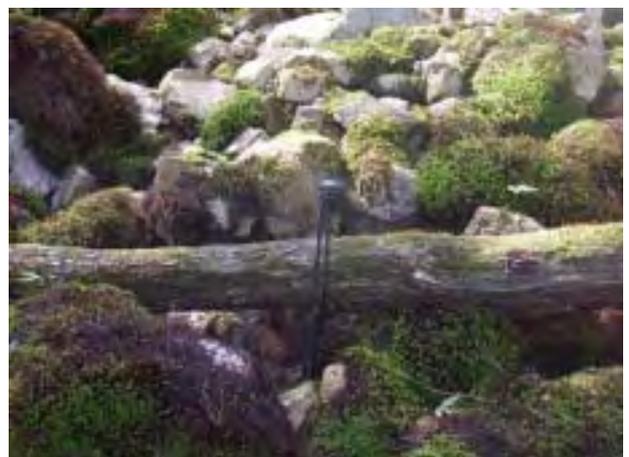


写真 17 : コケ園



18 写真 18 : コケ園のミスト



写真 19：オオバオオヤマレンゲ



写真 20：サクラソウの仲間

朝鮮産植物園は朝鮮半島に固有の低木、草本、シダ植物が集められている。オオバオオヤマレンゲ(写真 19) やサクラソウの仲間(写真 20) などが植栽されていた。

温室は 190 m²とあまり規模は大きくないが、花の香りを楽しむための植物(写真 21) や食虫植物(写真 22) が植栽されていた。冬期には氷点下 20 以下になるため、暖温帯に分布するヤツデなどの常緑樹も温室で管理されていた。

ピョンガン植物園は開園してから 2 年しか経っておらず、一目見た印象は非常にきれいに整理された植物園であった。園内の植物も整然と植栽され、その後の管理も十分行き届いているようであった。気象条件から東京と比較するとおそらく、雑草の発生も少ないと思われる。もちろん、職員の日頃の努力の成果ともいえるが、やはり非常勤職員の方も仕事をされているようで、多くの方が除草作業を行っている様子が見受けられた。また、山を切り開いた立地のため清水が多く、ボッグガーデンやポンドガーデンに利用されている一方で、ロックガーデンにおいては地下に石や配水管を設置するなどの工夫をしていた。コケ園のようにポンプアップした水を循環させミストに活用しているところもあり、地区に応じた水の管理に注意を払っている様子が印象的だった。今後、植栽された植物が成長するにつれて、見ごたえのある植物園になるだろうと



写真 21：温室



写真 22：食虫植物の展示

3. Pinx ゴルフクラブの植栽

名誉会員 岐阜薬科大学特命教授 田中 俊弘

リーさんとおっしゃる造園会社の社長さんのご案内で見学をすることができた。100ヘクタールに及ぶ広大なゴルフ場で、その中には高級別荘まで見られるところで、一流のゴルフ場設計家が設計し、一流の芸術家がアートの部分が受けもったということである。

元は牛の放牧場で会ったところをゴルフ場と別荘にしたものである。リー社長自慢なだけに、クラブハウス内にもふんだんに生きた植物が利用されている。クラブハウスの周辺でも、多数の野生種を取り入れた植栽が行われている。特にクラブハウスのテラスからの眺望には、これが牛の放牧場の跡地であったことと伺わせることができないほどの見事なものが見られた。聞くところによれば、ここの植栽にはすべて済州島の在来種を使用したということであった。園内にはゴルフ場の庭とは思われないような野性味あふれる自然なレイアウトが用いられている。写真の池でも、ゴルフ場になる前にすでに自然の池があったものかどうかもわからないような植栽レイアウトが行われていた。

本来火山性のとてもやせた土地であると思われるが、海を望む眺望のすばらしさからこの地を選んで計画されたものと思われるが、木材チップやバークの粉碎物をうまく使って植栽が行われているのが印象的であった。園内には何軒かの別荘が見られたがどんなお宅が所有されているのかとても立派で景観としても優れたものであった。朝が早い時間であったのか高級乗用車が駐車されているのが見られ生活のにおいがしたが、野外を歩いている人が見えなくて様子を知ることができなくて残念であった。園内にはそのほか、WIND MUSEUM や WATER MUSEUM、DUSON MUSEUM、四阿などが配され美術的要素がふんだんに取り入れられていた。一方日本では民間薬としては利用されるが植栽に利用される例に乏しいウツボグサまでもうまくグランドカバーとして利用されていた。そのほかイブキジャコウソウ、ハマナデシコ、コクマザサ、アワモリショウマ、*Allium* sp.など見事に野生種を利用されていた。ご案内いただいた彼の地の大学の先生によれば、植物の分類学的な要素に関しては十分配慮して作られてきたが、今後はアートの部分にも十分な力を入れていきたいということであった。

一方、当日の夕刻、この PINX GOLF CLUB の植栽をしている造園会社の広大なバックヤードを見学することができた。広大な面積の中にビニールハウスや圃場が配置され、栽培植物の培養が行われる一方で周辺の地域では半野生状態で種苗の確保が行われておりうらやましい限りの施設であった。筆者の自宅周辺は有数の苗木処で、個人の栽培家が個人の庭園向けの植木の繁殖剪定作業を行っているが、それにしてもここは見事であった。また韓国では屋敷や集落の入り口に人の形をした石のモニュメントを飾る習慣があるがこういった民族的な石造りの品も多数収集貯蔵されていた。さすがに広大な圃場を管理する必要性からなのか、園内の通路の所々には大型の番犬が配置されていた。



Abies koraiensis の植栽



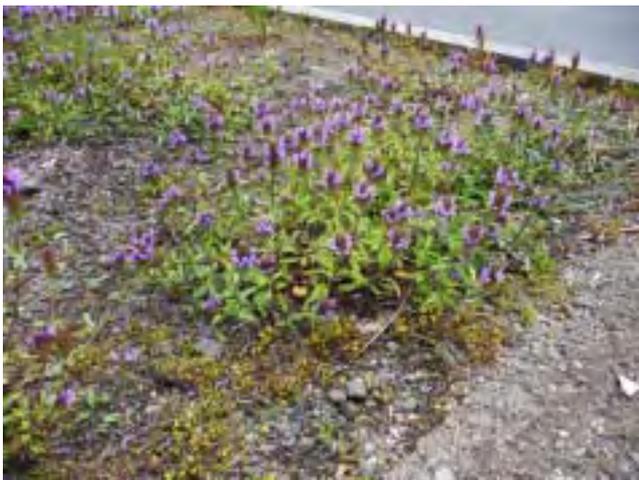
ガラス越しに見た中庭の植栽



クラブハウスからの景観。
自然の草原を再現している



自然の池を想起させる景観



日本では野生植物であるウツボグサをうまく
植栽に使っている

4-1 . ヨミジ (如美地 : Yeomiji) 植物園

名誉会員 岐阜薬科大学特命教授 田中 俊弘

濟州島の南の中文観光団地内の施設で、1989年に民間施設として作られたものであるが、1997年のサムブンデパート事故の関係でソウル特別市に寄贈された。同年同市施設管理公団による委託管理が行われている。34,000坪の敷地に3,800坪の巨大な温室が作られている。この温室はガラス質としては世界最大であり、高さ約38メートルの展望台と中央ホール、花園、水生植物園、多肉植物園、熱帯植物園、熱帯果樹園に分けられてそれぞれのテーマの植物が植えられている。室外部分には4ヶ国の民俗植物園といくつかのテーマパークコーナーが設けられている。現在世界130ヶ国の180の植物園と種子交換が行われている。年間140万人の入場者を数えている。職員は50-60人(ソウル市の時には100人であった、と栽培のための現場の職員は30-40人で、さらにリストラが進む模様であるという説明であった。常にイベントが行われ、外国人は10%程度でおもに国内の観光客が主で、小学生の学習体験や新婚旅行客である。

巨大温室内では、各種の催しが行われるようで、当日は植物の写真の展示が行われていた。温室の出口では貴重種たぶん日本ではレッドデータリストに載っているようなこの地域固有種の生きた植物の鉢植えの展示が行われていた。野外ではイタリア風庭園、日本風庭園、芝生広場などが圧巻であった。全体に比較的狭い敷地に所狭しと、効率的に配置されていた。日本でも民間の植物園では用地の利用の効率化がもっと図られていることは、各地の園で実感することのできることであるが、一時期公営になったこの園であるが、その片鱗を時間することができた。巨大温室の収集植物以外の屋外展示物については、国内あるいはこの地域の植物をうまく活用している点が印象的であった。また全体をアートの配置されている点も努力を認識することができた。



イタリア風の庭園



貴重種展示コーナー



高さ 38 メートルの巨大温室



芝生広場



植物写真の展示



日本風の庭園

4-2. ヨミジ植物園

東京都神代植物公園 小幡 晃
 名誉会員 岐阜薬科大学薬草園 田中俊弘

【園の概要】

所在地 大韓民国済州道西帰浦市上以橋達洞中文観光団地内
 済州島の南岸部
 面積 11.2ha
 開園 1989年10月12日
 主な施設 温室、展望台、韓国庭園、済州島自生植物園、日本庭園、イタリア庭園、フランス庭園
 園へのアクセス 済州市から南南西約30km



図1 ヨミジ植物園の位置（同植物園のHPからの転載）

1. はじめに

ヨミジ植物園は、ゴルフ場や水族館など多数の観光施設からなる中文観光団地の中にあり、観光施設としての性格が強い植物園であり、年間100万人以上の観光客が訪れるとされている。高さ38mの展望塔とその周りを取り囲むように作られた温室は、世界有数の規模であると称している。



写真1 中文観光団地内のゴルフ場
(展望塔からの眺望)



写真2 展望塔と周囲の温室

植物園協会海外事情調査隊は、6月15日の午後数時間のみの訪問であり、大変忙しいものであった。全般的な説明をしてくださったのは、支配人の南相奎氏。園の所有者や経営の変遷など興味深いものであった。また、園内の各ガーデンや温室内は、実際に植物を育成しているガーデナーが案内してくれたが、言葉と時間の関係で分からないことが多かった。

2. ヨミジ植物園の所有者、経営者の変遷等

南氏の説明と既存の資料を総合して、以下のようなことが分かった。

ヨミジ植物園は1989年10月12日に私立施設として開園したが、1995年6月29日に起きたサムブンデパート事故の関連で、1997年11月10日にソウル特別市に寄贈された。(当初の経営者が原因の事故でソウル市に損害が及んだものと思われる。南氏に話の途中「かた」に取られたのですね、と訊ねたところ、笑っていた。)以後3年前までソウル市の経営であった、と氏はおっしゃっていた。(1997年12月1日から、ソウル特別市施設管理公団に委託して管理させていたようである。)このソウル特別市の経営により、植物園の質が落ち、その対策として、3年前に再び民間に経営を委ねたとのことである。(氏の名刺には、Bookook Culture Foundationとあった。)その結果、植物園の質も持ち直したと言う。市営のときは、110名の職員がいたが、植物園の専門の人材ではなかった。職員の多さとともに、専門の職員がいなかったことが、植物園の質の低下をまねいた。このたびの民営化に際しリストラを行い、職員を5-60名に減らしたが、植物園の専門の人材を多く取った。現在植物育成に携わる職員は、3-40人いる。業務のアウトソーシングも、積極的に行っている、とのことである。

その他の聞取り情報

- ・現在入園者数は年約100万人、過去には年150万人を数えたときもあった。
- ・集客のための催しは、行っている。当園は観光植物園である。
- ・経営改善の一環として、市営の時の入園料6,000元を7,000元に値上げした。
- ・来園者構成の10%は外国人。

3. 主な施設と植物

約 11ha の園内は韓国のほか各国のガーデンからなっている。当日はメイン広場、管理棟での挨拶、隣接の芝生での説明と質疑、日本庭園、韓国庭園、済州自生植物園、イタリア庭園、フランス庭園、温室植物園の順に調査した。



図2 園内のイラスト地図（同植物園のHPから転載）

(1) メイン広場

観光植物園らしくバスや人で混雑した印象だった。螺旋状の刈り込みが目をついめた。



写真3 メインゲート



写真4 螺旋状の刈り込み（カイズカイブキの類と思われる）

(2) 日本庭園

池泉回遊式庭園と京都円通寺の枯山水を模したような日本庭園。太鼓橋や四阿なども配してある。



写真5 太鼓橋



写真6 枯山水の庭

(3) 韓国庭園

囲牆で外部と隔絶するのが、一つの特徴と思われる。家屋と一体の様式とも思われ、生活に密接な関係のある植物を植える習慣があるのか、ナツメが目立っていた。ナツメは韓国薬膳料理参鶏湯の食材である。内庭の池は韓半島を模したとのことである。如美亭という四阿は韓国伝統の様式である。



写真7 囲牆と大門（レンガで複雑な模様が生作られている）



写真8 ナツメ（並木をなしていた。Zizyphus jujube var. inermis と標示されていた。）



写真9 内庭の池と伝統的の四阿如美亭



写真10 国立樹木園でもよく目に付いた。マンシユウボダイジュと思われる。(韓国庭園から済州自生植物園に向かう途中。)

(4) 済州自生植物園

韓国本土と若干違った歴史を持つ済州島は、郷土意識が強いようである。このガーデンの表示板(写真11)には、自生の常緑広葉樹やハンラ山自生植物、温帯・亜熱帯の植物を大事にしていることが見受けられる。



写真11 済州自生植物園 (Jeju Native Plant Garden) の標示板



写真12 同標示板とホルトノキ



写真 13 濟州市内のホルトノキ街路樹



写真 14 (参考) 上 ハンラ樹木園入口
下 同樹木園のホルトノキ

特に、ホルトノキは濟州島の代表する樹木と考えられているようで、島内では大変目に付く。濟州市内の街路樹は相当な大きさであり、ハンラ樹木園でも主要な場所に植栽されていた。

(5) イタリア庭園、フランス庭園

ヨーロッパの庭園様式が、一目で観覧できるように整備されたものである。イタリアは斜面を利用した露段(テラス)式、フランスは平面的、シンメトリーを特徴とする整形式庭園である。フランス整形式庭園の幾何学的刈り込みは、チョウセンヒメツゲである。



写真 15 イタリア露段(テラス)式庭園



写真 16 フランス整形式庭園

(6) 温室植物園

ヨミジ植物園の温室は直径130メートルの円形をなし、面積は1.3haほどあり、世界有数の規模と称している。



図3 温室植物園のイラスト地図（ヨミジ植物園のHPから転載）

中央ホールを中心に、熱帯花木を植栽した花蝶園、熱帯水生植物をテーマにした水生植物園、サボテン等多肉植物を展示した多肉植物園、熱帯ジャングルを表現した熱帯生態園、トロピカルフルーツ展示の熱帯果樹園の、1ホール、5ガーデンからなっている。



写真17(左) 中央ホールの展望台 高さ38メートル
(温室植物園を俯瞰できる他、ハンラ山等外の眺望も素晴らしい。)

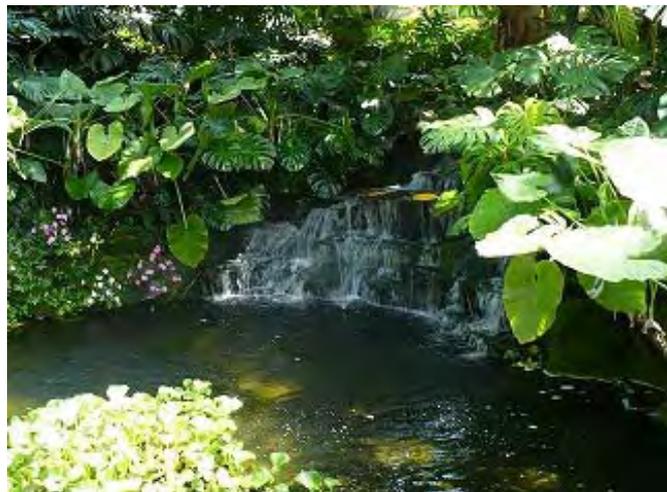


写真18(上) 水生植物園(演出を考えたつくり)



写真 19 多肉植物園

(*Furcraea sellosa* Koch. var. *marginata* Trel. と標示がされていた。)



リュウゼツランのような長い花茎が立って開花した後、その花茎にたくさんのムカゴ状の子がついている様子。*Furcraea* 属(マンネンラン属)は *Agave* 属に近縁の植物。



写真 20 熱帯生態園(林床のクワズイモ、生態園らしい表現)



写真 21 熱帯果樹園(同じ種を多数植栽して、「果樹園」となっている。空いた林床に遊具を配している。)

4. 絶滅危惧植物展

温室植物園の中央ホールの一角で絶滅危惧植物展(と思われる)展示を行っていた。濟州島レベルの重要と考えられる植物なのか、韓国のレッドデータブック記載種なのか、カテゴリーについて、十分把握できなかったが、世界的な生物多様性保全の潮流に呼応した取組と思われる。



写真 22 中央ホール一角の絶滅危惧植物展
(左のブース)



写真 23 同展示コーナーの様子



写真 24 絶滅危惧植物展のポスター
ハングル文字が読めないことが、悔やまれる。
ヨミジ植物園での調査の最後は、殆ど駄足だ
った。



写真 25 ミヤマトベラ



写真 26 ミヤマトベラの植物名・解説表示
(ハングル文字以外の記載は Fabaceae,
Euchresta japonica Benth.)



写真 27 ウスリーミセバヤ



写真 28 ウスリーミセバヤの植物名・解説表示【ハングル文字以外の記載は Crassulaceae, Hylotelephium ussuriense (Kom.) H. Ohba】



写真 29 イワガネ



写真 30 イワガネの植物名・解説表示【ハングル文字以外の記載は Urticaceae, Oreocnide fruticosa (Gaudich.) Hand.-Mazz】

5 . おわりに

民営から公営に、さらに民営へと変遷した経営形態、その間の状況、改革の実際など、不十分な調査ではあったが、日本の植物園とりわけ指定管理者問題を抱える第二部会の植物園には、おおいに参考になる事柄であると思われた。また、世界的な流れである生物多様性の問題に対する取組状況も日本の植物園と似たものがあるように思われた。

5. 平成20年度日本植物園協会海外事情調査「韓国調査隊」に参加して

摂南大学薬学部附属薬用植物園 邑田 裕子

今回訪問した中で、ソウルでは主に近郊の国立樹木園、平康（ピョンガン）植物園、韓宅（ハンテック）植物園や民族博物館などを、済州島では済州民族自然史博物館、如美地（ヨミジ）植物園、カヤ林などについて少し気が付いたことを記しておきたいと思います。

この調査ではウマノスズクサ科ウマノスズクサ属の *Aristolochia manshuriensis* と *A. contorta* (マルバウマノスズクサ) の植物が見たいという希望と韓国に於ける薬用植物を用いた薬に関係する現状の一端に触れる事ができたらという希望を持っておりました。また薬用植物を栽培しているところが見られたらという希望も持っていましたが、これはどこの国でも人家から遠く離れたところなどが多くなかなか実現しないのが現状ですので、あまり期待はしておりませんでした。

6月11日はまずソウルの北に位置する国立樹木園を訪れました。説明などを聞き博物館を見学した後は、園内が大変広いため、2つのグループに分かれて見学しました。私は栽培植物などが多く植えてある方ではなく、もしかしたらウマノスズクサ属植物が生えているかもしれない思い、自然林のような中を歩ける方のコースに参加しました。しかしこの樹木園の林内ではウマノスズクサ属の植物は見つかりませんでした。この樹木園と13日の民族博物館でウチワノキ（モクセイ科）に果実が沢山出来ているのを初めて見る事が出来ました。

その後ソウルから直線で約50km北東に位置する平康（ピョンガン）植物園に行きました。ピョンガン植物園は有名な韓方医の先生と奥様が数年前に開園し、急ピッチで整備を進めていました。一般の方も韓国人気ドラマ「大長今」（日本名「宮廷女官チャングムの誓い」）の影響で薬用植物の名前もよく知っていて、特に韓方医学に付いての興味も高まっているようです。この植物園で昼食に頂いた薬膳料理はおいしく健康に良さそうなものでした。昼食後に湿生植物区に向かって斜面を登って行ったところで、本来落葉広葉樹林であった所を切り開いて園路を作った、その園路の脇に *Aristolochia manshuriensis* の昨年芽生えたような個体が数本固まって生えていました。それは植栽しているという感じではなく、種子がそこに落ちて芽生えたという様子でした。周囲を探してみましたが、見える範囲には親株を思わせる蔓などは見つかりませんでした。この植物は韓国から中国東北部に分布する種類です。その後更に登りながらシャクナゲ類などやシダ類を見て、また下のほうに降りて行く途中でも探したが、先ほどの個体以外は見つからなかったです。下に降りて同行の坂崎さんが「よしずで囲ってある鉢植えの所を見たら」と言ってくれたので、大急ぎで見に行ったら、化粧鉢に先ほど見た *Aristolochia manshuriensis* と同じ位の大きさの個体がきれいに植えてあったので、驚きました。

今回の韓国ではここ以外の場所ではウマノスズクサ属の植物に出会う事はありませんでした。しかし一回でも見られた事は幸運でした。小さなものですが、野生に近いものだと思います。

6月12日の午後はソウルから南南東に直線距離で約50km行ったところにある韓宅（ハンテック）植物園を訪ねました。その植物園はいろいろなテーマのガーデンから成っていましたが、本来のガーデンの外側にチョウセンニンジンの栽培が見られました。日本で見ているように北側を開けて、周囲を黒い寒冷紗で被っており、中は果実の出来るサイズの個体が沢山栽培されておりました。植物園からの帰り道には更に多くの栽培の寒冷紗の掛かった所をバスの中から見る事が出来ました。

6月13日には午前中にソウルの民族博物館に出かけましたが、ここでは日本語のガイドボランティアの方が説明をしてくださいました。博物館の内部にも薬の使用の展示などがありましたが、外に大きな旗の立ったところに薬房を模した建物があって、生薬が吊るしてあったり、かごに入れておいてある所などを見る事が出来ました。

6月14日は済州島に移動してその日に済州民族自然史博物館でも、済州島の民家や生活などを見るとともに薬草利用の展示も見る事が出来ました。

6月15日は済州島のヨミジ植物園を訪れ、大変広い園内にナツメの花がちょうど咲いておりました。ナツメの果実を乾かしたタイソウは韓国でニンジン煎じるときに必ず一緒に用いるもので、有名な参鶏湯にも入っている物です。

6月17日は済州島から出発して帰国する日でしたが、午前中に島の北東部にある天然記念物のカヤの原生林を訪ねました。カヤは碁盤などでも有名ですが、種子は昔から薬用・食用にも用いられていました。ソウルは毎日晴天で暑かったのですが、梅雨入りした済州島で雨の中を林内の順路に添って見学しました。448m²の中に樹齢500年から800年のカヤ2、800本あまりが生育しているそうですが、中にはフウラン、ヨウラクランなどの着生ランなども着いているところを案内の方に教えていただきながら回りました。元々は自生の原生林だったようですが、経済的にも価値があり、厳しく規制が行われ見張り番や作業の小屋があったそうで、途中から植林も行われていたそうです。私たちが見て回った範囲でも所々には直線的に並んでいるところもありましたが、本当に大きな樹齢818年の木を見た時には感激しました。

今回は短い期間でしたが、いくつかの興味深い植物に触れる事が出来ました。



ナツメの花



チョウセンニンジンの栽培の様子．遠望．



栽培の様子．



昔の薬房を再現した建物



薬房の内部

6. 韓国の野菜料理とお茶

大阪市立大学理学部附属植物園 小澤 正三

韓国料理と問えば、「焼肉、辛い」と返ってきそうだが、滞在期間中の食事で実感したのは野菜が多いことであった。野菜は量も、種類も日本料理と比較して格段多いと思われる。韓国女性のスタイルの良さは、キムチの唐辛子に含まれるカプサイシンの賜物であると指摘する説もあるが、私は野菜の摂取量の多さにもあるのではないかと考える。そして野菜摂取量の多さは、ピビムパップ(かきませ御飯)で見られる如く、韓国料理の特徴である交ぜて(ピビダ=)食べることに支えられている。生野菜をそのみで多く食べるのは大変であるが、焼肉をチシャやエゴマの葉に包んで食べるとか、イカや鮮魚の薄づくりを菊菜等の野菜とコチュジャン(唐辛子味噌)で合えてフェ()にして交ぜて食べれば、意外と多く野菜が摂取できる。8日間の短い滞在ではあったが、その間に食した野菜を中心に韓国の野菜料理について雑感を述べたい。合わせて、韓国のお茶についても紹介したい。

まず韓国滞在初日の夕食会で食べた料理から紹介すれば、クジオルパン(九折板)。丸い重箱を九つに区切って(現在は必ずしも九にこだわってはいない)、そこに八種類の具が詰められ、これを重箱の中心にある餃子のかわ大の小麦粉クレープに包んで食べる料理であり、宮廷料理の一つとされている。具は、牛肉の細切り炒めを始めとし、薄焼き卵、椎茸の甘煮、ニンジン、筍の炒めもの、大根の茹でもの、珍しいところではトラジ(桔梗の根)の炒めもの。牛肉と卵を除いては、他はすべて野菜料理である(写真1)。

続いて「山で旨いはオケラとトトキ」、あのトトキ(ツリガネニンジン)の天婦羅。甘酢と甘味噌が用意されていたが、同席者から塩コショウが旨いのではないかと声があがり塩を所望、塩をつけて食べたのが最も旨かった。色・形・味ともホワイトアスパラに似ていた。同じキキョウ科ではあるが、トラジよりもトトキのほうが高級食材である。ちなみにトトキを朝鮮語(主として朝鮮半島の人々が、古来より使用してきた言語として使用)ではトドク()と言うが、朝鮮語はリエゾン(連音)するので、例えば主格助詞の(～が)が付けばトドギ()と発音する。はたして日本語が先か、朝鮮語が先か。わが国の文化形成が朝鮮半島を通じての大陸文化に大きく依拠していたことを考えれば、トトキの語源は朝鮮語にあると考えるのが素直であろうか。

その他にカボチャのお粥、粥というよりもスープの舌触りであった。薄切り大根の水キムチは、冷たく酸味があり過食気味の胃にやさしくスツとする。変わったところでは、エゴマのスープ。エゴマをすり潰したスープであるが、なかに入った小さな餅がチョロギの塊茎の形をしており、何か特別な意味があるのかもしれない。チョロギの原産地は中国南部と考えられ、朝鮮半島より伝わりやがて各地に広まった。わが国では食材として一般的ではないが、旅行先(山陰地方であったと記憶している)で、ほんのり赤く色づけされたチョロギの甘酢漬けを土産に購入したことがある。その名は、朝鮮語のミズを意味するチロンギ()に由来すると言われている。その他に刺身、食べ方は日本と同様であり、粉の練りワサビまで添えられている。最近韓国人も伝統的な鮮魚の食べ方の「フェ」のみならず、日式でも食べるそうである。それ以外にも骨付き牛肉の甘辛煮など、韓式会席は種類も量も多く日本人には過食ぎみであるが、料理のほとんどが野菜であったことを再述しておきたい。



写真1 クジヨルパン（九折板）
（写真提供：東大・田中健文氏）



写真2 平康(ピョンガン)植物園での
韓式薬膳料理（写真提供：東大・田中健文氏）

初日の最後に飲んだのが、生姜と桂皮を煎じて砂糖で味付けた甘い飲み物。ピリッと刺激があり冷たくて、茶色の液体に白い松の実が2~3粒ほど浮かしてあり美しく印象的であった。ナツメや干し柿の細切を入れることもあるそうだ。これをお茶として出されたが、とても日本人の感覚ではお茶とは感じられない。が、韓国滞在中、実に甘茶が多かった。後ほど、韓国のお茶についても報告するが、ちなみにこの甘茶、韓国の伝統飲料スジョングァと呼称する。

滞在中回数が最も多かったのがピビムパップの3回、人によっては4回。日本でも人気の石焼ピビムパップもあれば、銀の器のピビムパップもあったが、日本のそれに比べて野菜の量も品数も多かった。なお3日目の昼食・韓宅(ハンテク)植物園の山菜ピビムパップには、カンゾウの花のてんぷらと花蕾のあえものが添えられていた。花のてんぷらは黄色く見た目に美しかったが、味の印象はあまり残っていない。舌触りは、シソのてんぷらほどパリパリ感はなかったが、菊菜のてんぷらほどベタッともしてなかった。花蕾は茹でて、醤油のダシがかかっていた。コリッとして歯ざわりがよかったが、味は花と同様印象に残っていない。不味くはなかったが、特別旨かったということでもなかったのであろう。

ピビムパップに続くのは2回のシャブシャブ、韓国でもシャブシャブ()と言うが、これは明らかに日本語に由来していると思われる。なぜなら韓国で元来そのような牛肉の食べ方は見うけられないし、ショブシャブは明らかに日本語の擬声語と思われる。それはさておき、ソウルでの牛肉のシャブシャブと、済州島では名物の雉のそれ、どちらも野菜が多かった。牛肉のシャブシャブを例に添えられた野菜を挙げれば(量から言えば牛肉が野菜に添えられていたのであるが)、エノキ、椎茸、チンゲンサイ、ねぎ、白菜、もやし最後に名前はわからないがアザミの葉に似ている濃い緑の野菜、歯ごたえは硬くなかったし、舌に刺さることもなかった。

野菜の種類が最も多かったのは、2日目の昼食、平康(ピョンガン)植物園での韓式薬膳料理であった。園長はソウル江南区で平康漢方医院を営む院長でもあることを知って、よりいっそう薬膳料理の効用がうなずけた。韓国植物園協会の役員さんと店員さんに書いていただいたメモをもとに野菜の名前を挙げれば、アカザ、エゴマ、オタカラコウ、エゾウコギ、椎茸、シラヤマギク(ムコナ)、スベリヒユ、筍、トラジ(桔梗の根)、ヒユナ、フキの惣菜で、日本で言えば五穀米をいただいた。味付けは薄味で関西人好み、正直美味かった。韓国の食事はカライものもあるがウマイ、マズイものにはなかなかお目にかか

れない。平康(ピョンガン)植物園の薬膳料理は、今回の滞在でいち押し、美味しいのは勿論、医食同源実証食である(写真2)。

韓国の野菜料理の最後に、エゴマの葉の醤油漬けを紹介したい。白いご飯にのせて、箸でくるっと巻いて食べる。今回の滞在期間中には食しなかったが、食欲のない時にお勧めの惣菜である。私の居住地の近くJR鶴橋駅周辺は、昔から韓国・朝鮮の衣食店が多いが、最近の韓流ブームで特に韓国食料品店が増えた。そんな店に行けばどこでも手に入るが、朝食で食べるにはニンニクとアミの塩辛の臭いが気にかかる方は、自分でつくればよい。実に簡単である。醤油に味醂とお酒、昆布茶と市販の顆粒ダシのもとを加え一度沸騰させ火を止める。すりゴマとゴマ油を加えて、このダシにエゴマの葉をからめれば終わり。その日から食べることができる。一度チャレンジされてみれば如何でしょうか。

韓国のお茶で最近とみにわが国で人気を博しているのがユジャ茶、柚子の皮の水飴漬け(韓式マーマレード)を湯に溶いた飲み物。夏はこれを冷やして飲む。子供、女性に喜ばれる飲み物であるが、お茶と言うよりもジュースに近い。茶と名を有しているので、甘茶の一種としておこう。今回の滞在中には飲まなかったが、空港のカフェでも見かけたし、コンビニでもよく目にした。

次に、韓国の甘茶で有名なのがシッケ()。3日目の焼肉店で夕食後お茶として出されたが、かすかに白い透明液にふやけたご飯粒のようなものが残っていた。味は、さっぱりとした甘さで、冷たくて後味もよかった。これも韓国伝統飲料であり、ご飯を麦芽溶液に入れて発酵させ、砂糖を加えて冷たくしていただく。

他に五味子茶、濟州島の1日目の夕食後の甘茶。五味子を朝鮮人参の細かい根と煎じ、砂糖を加えた甘茶をいう。五味子とは、チョウセンゴミシの果実を乾燥させたもので、その味が「皮と肉は甘く、酸っぱく、核中は辛く、苦く、全体としてしょっぱい」ことに名が由来している。コンビニにて購入した五味子茶の配合表示は、五味子抽出液 60%、液状果糖 30%、オリゴ糖 10%とあり、朝鮮人参は含まれていなかった。ちなみに、濟州島で購入した五味子茶液は、名物トル・ハルバン(爺さんの石像)のガラス容器に入れられていた。(写真3参照)

変わったところで松葉茶、濟州島の造園家李()社長の植栽地を訪れた際によばれたお茶。温かく、ほんのりと松葉の香りを漂わせていた。作り方は、松葉を洗って2~3分熱湯で湯がき天日で乾かす。それを細かく刻んで今度は日陰で再度乾かす。急須に入れて暖かい湯を注ぐ。好みで砂糖を加える。薬効は、疲労回復に抜け毛予防。高齢の来訪者に対する李社長の暖かい心遣いであったのかもしれない。

その他にカリン茶、なつめ茶、アマドコロ茶などが甘茶として挙げるができる。勿論甘くないお茶もあり、わが国と同様に緑茶と麦茶が一般的であるが、珍しいところで蓮茶、菊花茶、バラ茶、桑の葉茶などがある。

最後に、今回の滞在中愛飲していた甘くないオクスス・スヨム茶を紹介する。オクススとはトウモロコシの韓国語名(注を参照)であり、オクスス茶は以前から韓国のお茶として知られている。トウモロコシを煎じたもので、香ばしく夏場に麦茶と同様冷やして飲むことが多いが、オクスス・スヨム茶は今回始めて知った。スヨムとは朝鮮語でヒゲを意味する、すなわちトウモロコシのヒゲ茶。トウモロコシのヒゲとは、雌花の毛髪状花柱である。コンビニで購入したTバッグの箱にはトウモロコシのヒゲの秘密として、「韓国本草図鑑」によれば生薬名を「玉米鬚」と言い、思いのほか驚くべき力が秘められていると説明されている。その秘められた力とは、利尿作用があり糖尿病、高血圧に効果があることだ。Tバッグの配合は、トウモロコシのヒゲ 15%、トウモロコシ 82%、アマドコロ 3%と表示されている。韓国でもスヨム茶は人気があるようで、ロッテのペットボトルはトウモロコシのビーナスが印刷されて

おり、ホテル横の自販機では早朝いつも売切れだった。糖尿病に効くスヨム茶のボトルの絵が、美人のビーナスとははなはだ意味深である。ただ、スヨム茶自体に人気があるのか、トウモロコシのビーナスが好まれて売切れたのかは、短い5日間のソウル滞在ではどちらとも断言しがたい。(写真4参照)

注：朝鮮語と表記したものは、ソウルで発行された国立国語研究院編集の「標準国語大辞典」でも、平壤の社会科学出版社発行の「朝鮮語大辞典」でも確認できたものである。しかし、オクススを後者でひけば、カンゲネンギ()を見よとの指示があり、「北」では通常 を用いていると思われる。故に、オクススのみは韓国語と表記した。



写真3 トル・ハルバンの五味子茶



写真4 トウモロコシのビーナス

7. ソウルと済州島で見た若干の植物について

坂崎 信之

日本植物園協会の研究調査の仲間に入れていただき 2008 年 6 月中旬にソウルとその近郊、それに済州島に連れて行って貰った。私の見た一部を報告する。

朝鮮半島の気候帯について

国立アーボリタムには「森林博物館」という立派な施設がある。内容については学ぶべきことが多いが、その中で朝鮮半島の気候帯についての説明があったので、参考の為に写真と説明を記しておく。地名や樹種名については適当でないかもしれない。



写真．朝鮮半島の植生帯を説明する図．

- 白色：寒帯林
- 水色：温帯北部林
- うす黄色：温帯中部林
- こげ茶色：温帯南部林
- 黒色：暖帯林

- 1.寒帯林：平均気温 5 以下 ピョンナムブツ、ハムナムブツの高原、高地帯
代表種：エゾマツ、シラカバ、チョウセンシラベ、
- 2.温帯北部林：平均気温 5 ~10 ピョンアン、温帯中部以北
代表種：チョウセンゴヨウ、モミ、カシワ、オノオレカンバ、モンゴリナラ、イタヤカエデ、
チョウセンミネカエデ、イブキ
- 3.温帯中部林：平均気温 10 ~12 東海岸北緯 40 度、中部 38 度、西海岸 39 度
代表種：チョウセンマツ、ゴヨウマツ、イタヤカエデ、コナラ、エゴノキ、イブキ、クヌギ、
- 4.温帯南部林：平均気温 12 ~14 東海岸北緯 38 度、中部 36 度、西部 37 度
代表種：チョウセンイヌガヤ、クロマツ(チョウセンマツ?)、タケ類、ノグルミ、エノキ、
キリ、コウライシャラノキ、ヒイラギモドキ
- 5.暖帯林：平均気温 14 以上 北緯 35 度以南、海岸部北緯 35 度 30 分以南
代表種：クスノキ、ツバキ、マサキ、シラカシ、ホオノキ、イヌツゲ

ソウル付近での常緑広葉樹

ソウル辺りは北緯 37 度位だから、日本の仙台辺りになる。気温の月別平均値は 1 月に -2.5 を示す。これは盛岡や函館に匹敵する。所が、話によると -20 に迄さがる日があるというのだ。シベリア高気圧による北西風の影響は大きい。勿論河は凍ってスケートもできるとか、兎も角寒いらしい。上記、気候帯に従うと、ほぼ温帯中部林と温帯南部林の間にある。

私の注意していた問題はこの辺で常緑樹があるか、あるとすれば何か?ということだった。もちろん、針葉樹は含まない。国立樹木園やそのほかいくつかの植物園などを見学したが、結局目にしたのは、以下に述べる 2 種類のみであった。これらの種類は北海道などの寒地での造園樹種として期待できると思う。



チョウセンヒメツゲ

精しくは上原著『樹木大図説』 811-812 にあり、高さ 6m になるというが、私の見たのは、せいぜい高さ 2m まで、ソウル市内では生垣として盛んに使われていた。刈り込みにも適応性がよく、美しい生垣をつくる。冬の寒さにも全く問題なく緑が美しいという。HD5 まで耐えるらしい(写真 上左、右)。

ツルマサキ

精しくは上原著『樹木大図説』 904-905 にあり、分布は北海道、本州、四国、九州の山地、それに朝鮮とされる。私の知っている限り葉の形は細長いものから広楕円形までである。枝の途中から根を出して他の石、壁、などにも張り付くツル性のものである。マサキに比べると耐寒性はかなり強いようだ。造園樹種としてアチコチで見ることができた(写真 下)。



济州島では

济州島は朝鮮半島の南西部にあり、韓国の最南端で福岡県と同緯度の火山島であり、付近を対馬海流が流れていて、海岸にはハマオモト（ハマユウ）の自生地もあり、大凡の気候を推定できる。しかし、冬には半島部と同様に北西季節風の影響や島の中央に漢拏山がそびえる地形的要因により、非常に風が強く島の南北の気温差が大きいという。島の南側は温かく柑橘の生産が盛んであり、ビニールハウスも多く見られる。ここの植物園は島の南西部の最も温暖な場所に位置し、亜熱帯の雰囲気を出している。

この島は、中井猛之進『東亜植物』1935によると、海岸に近い所には、ウメ、ムクロジ、トベラ、ハマヒサカキ、ハマゴウ、ハマナツメ、ハマボウ、ジャケツイバラ、シャリンバイ、サンゴジュ、ハマビワ、ヒメズリハ、カイガンマサキ、オオバグミなどがある。私の特に注意してみた種類に、ハマオモト、ツブキなどであった。ヤツデもまた原産種らしく沢山見た。

ホルトノキ

ホルトノキは日本では暖帯南部に自生し、かつては東京付近では寒さに耐えず越冬が困難であった。この島の北側の市内で街路樹として使われ、生育は良好であった。この木は、ちょっとヤマモモに似て

いるが、赤く色付いた葉が混じっているので遠くからでも区別できる。この種類が使われているということは寒さが九州北部辺りとほぼ同じと思われた。『東亜植物』によると、クスノキと同様に原産種という(写真 下)。



スギ

スギは済州島に自生するのは疑問である。短時間ながら山を見た時全く目にとまらなかった。しかし、人家の近くには多く見る。特に蜜柑畑の周りには必ずといってよい程防風用として植栽されている。日本では柑橘畑の防風垣にはイヌマキが多く用いられているのを見る。ミカン畑にイヌマキを使う利点は、
 1. 枝が細く剪定しやすい。2. 枝の伸長が遅い。3. 強剪定に耐え、枝葉が密になり防風性に優れる。
 4. 強風でも倒れない。などである。

スギはイヌマキに比べて成長が早い利点があるが、そのほかの点では劣ると思われる。済州島ではスギは高く伸び、日陰をつくるのではないかと、人ごとながら心配になる。日当たりが悪ければ、蜜柑の品質に影響するだろう。それでも、強風を防ぐに必要なのであろうか。風の強いこの地方で防風用にスギを植えるのは、北西風が強く積雪の多い富山平野の屋敷林に丈の高いスギが植えてあるのと同じなのであろうか。或いは、昔からの習慣でスギを使っているのかもしれない。

ハマオモト(ハマユウ)

日本では、西南諸島から関東南部の海岸に見るもので、殆ど降霜のない場所に生え、潮風に耐える海岸植物だ。島の南東部の海岸に自生地があるという。植物園内のものは寒風にされられない場所にあった為か、冬の痛みは全く見られなかった。この種類は草姿や花が特殊で観賞に堪えると思われるが、意外に植栽を見ることは少なかった。

ツワブキ

『東亜植物』ではこの島にツワブキの自生があると述べている。そして、多くの場所で植栽したのを見た。石垣積みの際間にも植えていたのはよく目立つ。道路の緑地帯にも植えてあるのを見た。九州などではツワブキの若い葉柄をよく食べるが、ここでは全く食べないという。突っ込んで聞いても結局、食習慣がないということらしい。

イタビカズラとテイカカズラ

2種共、この島に自生するかどうかは知らない。我々にとって珍しいものとは思えないが、壁に這わせてとても綺麗だったので参考までに写真を示す。テイカカズラはちょうど白い花が満開であった(写真下左、右)。



カヤ

この島東部に「榧子林 Bijarim」がある。説明書を引用すると「天然記念物 374 号指定の榧子林は面積 448、165 m²に樹齢 500-800 年の榧 2,800 余本が自生している。樹の高さは 7-14m、直径 50-110cm そして枝張り巾は 10-15m の巨木が群生する世界的に珍しい榧の原生林である。」「21 世紀の済州特別自治道の平穏安泰を祈る新千年榧は樹齢 818 年高さ 14m、幹周り 6m、枝張り巾 5m です。国内の他の榧の木及び道内の総ての木の中で最高齢樹として自然の平穏無事を護ってきた崇高さを称えて、希望と繁栄を謳歌する新千年を迎え、2000 年 1 月 1 日に新千年榧と名付けられた。」以上の説明は決して誇張でない。そこに鎮座するカヤに対する者は長い年月を経た老樹が発する神々しい気を感じるに違いない。素晴らしい、の一言に尽きる。この島を訪れた方々に是非お勧めしたい(写真 次ページ)。

